

牧会
投稿論文

牧会における人間研究と現象学的アプローチ

岡村直
樹岡村直樹

I. 現象学的研究の方法と意味

A. フッサールの現象学

現象学とはオーストリアの哲学者、エドムント・グスタフ・アルブレヒト・フッサール (Edmund Gustav Albrecht Husserl, 1859 年～1938 年) によって提唱された哲学の一分野である¹。フッサールはそれまでの意識を自明視する実証主義的な認識論を、実在の予想に基づく態度であるとして嫌い、ありのままの「事象そのもの」を明らかにすることこそが大切であるとした²。そのこと

¹ ヘーゲルも「精神現象学」という著作を残しているがこれは彼が提唱した「意識」を問題とする哲学の分野で、意識そのものから理性に至る発展の過程について言及したものである。この著作は精神の弁証法的発展をその題材としており、フッサールの現象学とは大きく異なる。

² 認識は認識される客観と、認識する主観の対立の上に成り立つ。では認識はどのようにその対立を乗り越えて明証な直感と、確実な真理に達することができるのか。そのために彼は、例えば世界がすでに「ある」とするような態度を棚上げ「エポケー」(判断停止)とし、そのような信念、そして「ある」とされる世界がどのように成立し、経験からどのように構成されるのかを探求することが必要不可欠であるとしたのである。デカルトからヘーゲルに至るまでの近代哲学は、「世界は客観的に存在する」という大前提の上に成り立っていたが、この大前提こそ問題がある

のために彼は「現象学的還元」という独自のアプローチを生み出した。これは日常生活における人間の意識が素朴に信じて疑わない世界の諸事物(事象に対する好き、嫌い、肯定、否定等の判断を含む)を「かっこ」に入れ、これに対して無関心で中立的な立場をとった後、まだそこに残るものを「純粹意識」とし、それを厳密な哲学の題材とする方法である。フッサールは現象学を当初、「無前提」で「純粹」な哲学の学びになりうると考えていたが、その後人間の意識を極端に抽象化することに限界を感じ、現象学の矛先を厳密な哲学から、具体的な「生活世界」へと方向転換させていった。現象学はその後、フッサールの後継者であったマルティン・ハイデッガーによって実存主義哲学へ、その道筋を大きく変えることになる³。

B. 現象学的方法とその応用

現象学は、哲学以外の様々な学問分野に対しても非常に大きな影響を与えている。特に現象学的還元という方法、つまり先入観を排して内観に現われる現象を直接調べて考察することというアプローチ自体が、様々な形で応用されている。以下は現象学的方法が用いられている2分野の例である。

1) 現象学的心理療法

現象学は哲学の一分野として、心理学の基礎としての役割を果たしている。特にフレデリック・パールズのゲシュタルト・セラピーや、カール・ロジャースのクライエント中心療法等に影響を与えていると考えられている。現象学的方法を用いた心理療法としては、現象学的心理療法をその例に挙げることが出来る。現象学的心理療法は、心理カウンセリングにおいて個々の経験や、表れてきた現象を描写し、その描写から、テーマを見出し、更にそのテーマを様々な観点から検討していき、自己内において、新しい意味付けを行う療法である。具体的には、カウンセラーがクライエントの話を、心を集中させて無心に聞き

とフッサールは感じたのである。

³ ハイデッガーは自然界の中で人間だけが観念の世界を持つことから、人間を「現存在」と位置付け、更に人間の死と死への自覚が生きていることの意味であると考えた。

つつそれを直感的に描写するといった方法が用いられる⁴。

2) 宗教現象学

現象学的に宗教を研究することは、例えばジョン・ヒックの宗教多元主義に大きな影響を与えている。ヒックは現象学に基づき、自然主義的に宗教を定義し、また様々な宗教形態に共通する内容を明確にしようと試みた⁵。宗教現象学は、更にフッサールの現象学的還元という方法を用いて宗教を研究する。フッサールの場合、現象学的還元を用いるエポケーとは、例えば世界がすでに「ある」とするような態度を棚上げし、意識に現われたものを素直にあるがままに視る態度を指すが、宗教現象学においては、宗教の真理性や絶対性といった見方を「かっこ」に入れ、それらから身を引き、中立的な立場、あるいは判断不可能な立場から宗教を研究するものである⁶。

C. 現象学的研究方法

現象学的心理療法や宗教現象学は、フッサールの哲学的世界観を心理学や宗教学のコンテキストにおいて受け入れ用いるが、現象学的研究方法は、現象学的還元の方法の部分、つまり「できる限り先入観を排して内観に現われる現象を直接調べて考察する」という部分を取り入れ、推論や試論からではなく、個々の現象に視点を移し、そこを出発点として行う研究の方法論である。

⁴ ムスターカル、クラーク・E。「現象学的心理療法」(ミネルヴァ書房、1997年)

⁵ John Hick, *An Interpretation of Religion: Human Responses to the Transcendent*. (New Haven: Yale University Press, 1989), pp.1-3.

⁶ 「宗教現象学におけるエポケーとは、自分の信じている宗教の真理を絶対とする信憑性を括弧に入れることである。つまり宗教現象を独断的に価値判定しないということであるが、むしろ、どうにも価値判定しようもないもの前に立たされているといったほうが実際に近いかもしれない。エポケーは無前提の立場に立とうとすることではなく、判断が不可避的に関わる真理の問題から身を引いて、判断を中止するのである。あるいは既得の概念で判断しない、聞き手の立場になる、相手の身になる、などと言い換えてもよい。」堀越知巳「宗教現象学の方法」『早稲田商学』第305号(昭和59年6月30日)30頁

1) 質的研究の特徴

現象学的研究方法の代表的な研究方法のひとつに、質的研究を挙げることが出来る。質的研究は大まかに言えば、研究対象を数においてではなく、その質において理解し研究する事を指す。量的研究において研究の質は、数量的にサポートされた統計学的データに基づくものでなくてはならず、ある意味機械的にデータが解析、分析されていく過程でそれが決まるものである。一方質的研究に関しては、以下のようなユニークな特徴を挙げることが出来る⁷。

- ・質的研究は仮説を立て、またその検証することを目的としない。
- ・質的研究は実験的研究状況を設定しない。
- ・質的研究はインタビューやその他の観察を重視し細かい記録を作成する。
- ・質的研究は研究過程での研究者の主観を考慮しその内容を取り入れる
- ・質的研究は記録以外に得られた資料も排除せず総合して検討する。
- ・質的研究は研究対象の一般性や普遍性より、具体性、個別性、多様性に即する分析を行う。
- ・質的研究は研究対象や、そこに派生する様々な問題を社会・文化的な文脈の中で取り扱う。
- ・質的研究は質的データに基づいて分析、理論化を行い、現象に内在する意味を見出す。

質的研究は具体的な事例を重視し、個々の現象を時間、地域性といった特殊性の中で捉えようとする方法である。また特に人間自身の行為や表現を出発点として、それを実生活の場所と結びつけて理解しようと試みる方法でもある⁸。さらにこの研究方法は、量的研究が取り扱いを躊躇する、人間の立ち振る舞い、感情の動き、直感、といった部分にも大胆に切り込むことを可能とするのであ

⁷ Michel Quinn Patton, *Qualitative Research and Evaluation Methods* (Thousand Oaks, California: Sage Publications, Inc., 2002).

⁸ ウヴェ・フリック『質的研究入門-＜人間の科学＞のための方法論』(春秋社、2002年)、19頁

る。

2) 質的研究のプロセスとグラウンデッドセオリー

質的研究のアプローチを科学的な研究方法にまで押し上げた功績を持つのは、バーニー・グレイザーとアンセルム・ストラウスの2名である。彼らの質的研究方法論は、グラウンデッドセオリーとして知られ、データ収集、データ分析、理論構築という3つの主な段階から構築されている⁹。例えばインタビューを中心に据えたデータ収集の場合、研究者は自らの予見に頼らず、研究対象者が出来る限り自由に語る事が出来るよう心がけつつ質問の内容や、話しの導き方をオープンに保つことが必要とされる。またインタビューの内容そのもの以外にも、研究対象者の語調、顔の表情、体の動き、視線、服装等までもがデータとして記録されることもある。研究対象者の数も、量的研究の場合のように多くを必要とはしない。広く浅く学ぶのではなく、狭く深く学ぶことから、研究対象者や対象とする様々な現象をどれだけ深く掘り下げることが出来るかという点が重要なのである。データの収集後、研究者が理論の構築に進むには、まずデータ分析を通じてさまざまなカテゴリー（まとめ）を生成し、それらを階層的に組織化していくことが必要である。例えばある社会現象を、質的データを通して分析しようとする場合、カテゴリー生成の枠組みには、2つの側面が存在する。その社会現象が生起する条件、要因、状況、現象からどのような結果が生まれているかという構造的側面と、その社会現象がどのような展開や、やり取りを経ているのかというプロセス的側面である¹⁰。またデータ分析のために必要なもう一つの手法にコーディングがある。コーディングとは、データ中の諸概念を識別し、特性を発見した上で構造的に関連づけ、新たな概念を構成し、理論化を可能にするためにコード（コードワード）を付ける作業である¹¹。

⁹ Anselm Strauss and Juliet Corbin, *Basics of Qualitative Research* (Thousand Oaks, California: Sage Publications, Inc., 1998), p.12.

¹⁰ Ibid., p.123, p.192.

¹¹ Ibid., p.153, p.179.

最終的な理論構築は、グラウンデッドセオリーの到達点とも言える。質的に得られたデータを分析し、そこに見出すことのできる共通点や相違点等から理論構築を行うのである。グラウンデッドセオリーという名前からもわかるように、構築された理論は推論や試論に基づくものではなく、現象が起こっている現場、つまり「グラウンド」（地面、地べた）から直接に得られたデータを基に築かれたものであり、最も現実に近いものとなるのである。

質的研究はともすると、単なる「インタビューの記録と、そこから主観的に導き出される研究者なりの解答」と考えられてしまうことが多いが、実際は非常に細かいデータ分析を必要とする研究方法である。しかし一方で量的研究のように、それはいわゆる科学的合理性に優れた研究方法ではなく、主観的で直感的な側面を持ち合わせる研究であることも確かである。実際、質的研究の第一人者であるマイケル・クイン・パットンは、質的研究のデータ分析を「科学であり芸術ある」（the science and the art of analysis）と呼び、研究者の創造性を研究の重要な要素としている¹²。質的研究は近年、様々な研究分野において用いられる研究方法となっている。特に心理学、看護学、教育学、社会学、文化人類学等においては、ひとつの主流な研究方法として確立されつつある。

II. 現象学的研究方法と教会における応用

A. 人間研究の必要性和聖書

前記されたように現象学は様々な研究分野の基礎となり、また多くの応用研究分野においても用いられている。では現象学的アプローチは、福音主義神学の範疇においても応用が可能であろうか。例えば宗教現象学では、宗教の真理性や絶対性に対する判断から身を引く事が宗教研究の前提であり出発点であるとする。もちろんそのような態度で神学にアプローチすることは、福音主義神学の精神に相反するものである。創造主である神の権威、聖書の無誤性等の教理を考慮せずして、教義を語ることは出来ないからである。では現象学は、福

¹² Patton, *Qualitative Research and Evaluation Methods*, pp.542-458.

音的な信仰を持つクリスチャンにとって、いかなる場合においても無益な思想なのであろうか。確かに現象学と福音主義神学は、その基本的な世界観や価値観において相容れない思想であると言うことはできる。しかし現象学そのものではなく、現象学的アプローチに関してはそうではない。繰り返しになるが、現象学的アプローチとは、「できる限り先入観を排して内観に現われる現象を直接調べて考察する」方法である。福音主義の立場から考えれば、このアプローチが前記の宗教現象学のように、「神の啓示の真理性や絶対性から身を引いた、中立的な立場からの聖書の学び」に用いられることには問題があるが、研究の対象が社会や人間である場合はどうであろうか。

聖書は人間という存在に関して様々な真理を語っている。人間は肉体と魂（霊）から成っており（1テサロニケ5:23、マタイ10:28、1コリント5:3、5）、罪を持ち（エペソ2:1、ローマ3:23）、その結果永遠の死に至る存在である（ローマ5:12）。しかし人間は仲保者として来て下さったキリストを通して救われるのである（ピリピ2:6、7、ヨハネ3:16）。これらはすべて人間という存在の本質に関する教えである。人間が聖書を通して自らを、また他者を、その本質において知り理解することは必要不可欠な事である。しかし一方で、そのような本質（性質）を持つ人間が、個別の社会背景、時代背景、地域背景、文化背景の中でどのように生き、またどのように他者との関係を持つのかについて知ること、言い換えれば、人間の本質が、実社会でどのように表されるのかを知ることも必要なのでは無いだろうか。

ルカはその記述の中で、アテネに住む人間の行動について語り¹³、パウロは彼らの宗教心について言及した¹⁴。更にパウロは魂の獲得のための、ユダヤ人、異邦人、「弱い人々」それぞれに対する深い理解に基づいた個別のアプローチについて語っている¹⁵。これらの記述は今日のクリスチャンに対して、様々な地域、

文化、社会の背景の中で、人々が何を信じ、生き、行動するかについて知る必要性を説くものであると言えるのではないだろうか。

日本の福音派クリスチャンはパウロやルカのように、人間理解を深めようと努めているだろうか。またたとえそれを求めていたとしても、伝道対象である人間、そして彼らが構成する社会、彼らが培った文化についての理解を得る手段を持ち合わせているだろうか。聖書はどのようにパウロやルカが、アテネ人や異邦人についての深い理解を得るに至ったかについて言及していない。ただひとつ言えるのは、彼らは恐らく「アテネ人論」や「異邦人論」といった他者の著作からその知識を得たのではなく、聖霊の力に助けられつつ、自らが見聞きした知識の積み重ねによってそれを得たのであろうということである。

聖書の人間観に立脚し、聖霊の助けを仰いだ上で、私たちが更なる人間理解を深める手段には、様々な方法が考えられる。本やセミナー等を通して他者から学ぶのは最も手早い方法であろう。しかしそのような場合、その知識は非常に一般化された、広く浅いものであることが多い。社会の多元化、価値観の多様化が進む現代日本において、紋切り型の人間分析は果たして効果的であろうか。更に、人間理解の知識を他者に求める場合、その知識が聖書的な人間観に基づいていない場合も多い。福音的な出版社から出ている日本人論や文化論の著作はその数は圧倒的に少なく、仕方なくセキュラーなソースに依存してしまうことも多いであろう。

B. 福音主義神学と現象学的研究方法の利点

上記のような状況の中で、現象学的なアプローチ、特に質的研究方法は私たちクリスチャンにひとつの効果的な選択肢を与えるのではないかと考える。クリスチャンが質的研究方法を用いて人間理解を深めようとするとき、そこに少なくとも4つのメリットを見出すことができる。第一に、クリスチャン自らが研究者となるとき、他者、特にクリスチャンではない者の人間理解に頼る必要性が軽減する。もちろんクリスチャン以外の者による優れた人間理解の著作は多く存在し、またクリスチャンによる人間分析が常に正確であるとも限らないが、少なくとも福音的な神学に基づく人間理解のメリットは大きい。第二に、

¹³ 使徒の働き17:21「アテネ人も、そこに住む外国人もみな、何か耳新しいことを話したり、聞いたりすることだけで、日を過ごしていた。」

¹⁴ 使徒の働き17:22「『アテネの人たち。あらゆる点から見て、私はあなたがたを宗教心にあつい方々だと見ております。』」

¹⁵ 1コリント9:19-22「……弱い人々には、弱い者になりました。弱い人々を獲得するためです。」